毎日新聞　第53139号　【明治5年創刊】明治25年3月8日 第3種郵便物認可　©毎日新聞社2023（日刊）

MAINICHI
毎日新聞
9月25日（月）
2023年（令和5年）
発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

心筋梗塞死亡率 女性は倍

見過ごされてきた 性差

DeepM

日本人の死因として、がんに次いで2番目に多い心疾患。このうち、急性心筋梗塞で死亡する人は年間3万人を超える。60代以上の男性が多く発症することから「男性の病気」というイメージが強いが、さまざまな統計データをひもとくと、女性の死亡率は男性のほぼ2倍であることが判明した。性別による大きな差は何が原因なのか。医療の現場から探った。

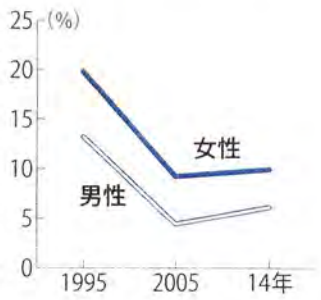
8月、仙台市青葉区の東北大星陵キャンパス。研究室の大型ディスプレーは、2本の折れ線グラフを表示していた。ピンク色は女性、青色が男性。ピンクの折れ線は常に青より高い位置にあった。

グラフは、急性心筋梗塞のため宮城県内の病院に入院した患者の死亡率で、30年間の推移を男女別に示していた。この間、研究と治療に当たってきた安田聡教授(61)は切り出した。「女性が男性の倍近くと死亡率が高いのは、宮城に限らず全国や海外でも同じ。この状況は、30年前からおおむね変わっていない」

安田教授がこの病気の性差を明確に意識するようになったのは2006年、東北大病院への着任がきっかけだった。

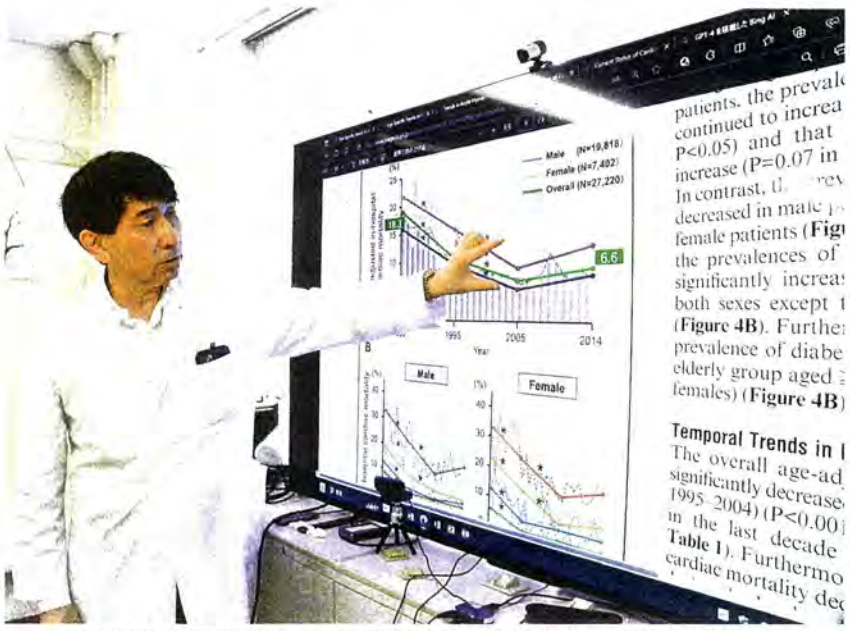
全国調査 男性と差 縮まらず

宮城県では1979年、適切な治療や経過の改善を目的に、同院が中心となって「宮城県心筋梗塞対策協議会」を設立。県内の患者の症例ほぼすべてを集め、診療に役立ててきた。全国的にも例をみない規模の研究で、現在までに約3万件の症例が登録されている。膨大なデータを分析するうちに「男女で死亡率がこんなに違うのか。治療法や救急搬送の技術は年々進歩しているのに、その差だけはずっと縮まっていない」と驚いた。



急性心筋梗塞で宮城県内の病院に入院した患者の死亡率

※宮城県心筋梗塞登録研究のデータを基に作成。死亡率は各年で同じ条件で比較するため、統計的に年齢調整している



男女の死亡率の差について説明する安田聡教授＝仙台市青葉区の東北大で8月、本橋敦子撮影

全国でも同様の傾向があるのかを調べるため、安田教授は「JAMIR（ジャミア）」（日本急性心筋梗塞登録）を基にした研究に、主任研究員として参加した。JAMIRには急性心筋梗塞の患者を多く受け入れてきた10都道府県の医療機関が作る17研究グループが参加する。医師が診断し、登録された症例は国内最大規模になる。

11～13年の3年間で、発症から24時間以内に入院した患者は2万4462人。女性の5181人に対し、男性は約3倍の1万5281人だった。60代以上の男性が全体の半数を占めた。

ところが、死亡率からは別の傾向が浮かぶ。

入院から30日以内に死亡した割合は、男性が6・9％（1054人）なのに対し、女性は約2倍の12・4％（642人）に達していた。その理由に迫るかぎが、発症から治療開始までにかかる時間の差だ。【本橋敦子、堀智行】

3面につづく

2023年（令和5年）9月25日（月）毎日新聞朝刊　第1面

※転載許可取得済み